

娘の父

— ミスター・ギブスンの変容 —

玉 森 彩 弥 香

序論

ミスター・ギブスは『妻たちと娘たち』に登場する人物の中では、モリーについて重要な人物である。ギブスは物語の最初から最後まで通して存在し、物語上の重要な出来事にはほぼ必ず登場してなんらかの関わりを持つ。あるいは、シンシアの秘密のように、ギブスがモリーと関わりを持とうとして拒絶されること自体が、モリーの成長のような物語の中で重要な事柄につながる場合もある。また、表題の『妻たちと娘たち』をミセス・ハムリー、ミセス・ギブスン、シンシア、モリーとするなら、ミセス・ハムリーを除く3人はギブスンの妻と娘である。また、ミセス・ハムリーは、ギブスンの往診を心から楽しみにしており(44)、後にギブスンの娘モリーを預かり、娘のように可愛がる。Edgar Wrightは『妻たちと娘たち』には、モリーとギブスンという2つの観点が存在しているとして、ギブスンからの観点を次のように説明している。

The astringency and irony of the novel owe a great deal to Mr. Gibson, sparing of his words, intelligent, and slightly sarcastic whose voice is undoubtedly that of Mrs. Gaskell as observer of men and manners, as Molly is the voice of her sensitivity. (227)

Wrightは、物語の辛辣さと皮肉はギブスンに負うところが多く、またギブスンの声は観察者としてのギaskellの声であるとしている。これは、ギブスンの道徳観が極めてギaskell自身のそれと近く、ギブスンが物語の中で理性的な観察者としての役割を果たしていることを示唆する。

また、Holly Pikeも次のように述べている。

The positive characters are those who adopt the merit system (Mr. Gibson, Molly, Roger, Lord Hollingford, Lady Harriet), while those who adhere to the aristocratic system (Mrs. Gibson, Squire Hamley, Lady Cummor) are presented as slightly ridiculous, even caricatures. (147)

Pike はギブスン、モリー、ロジャー、ホリングフォード卿、レディー・ハリエットと並べ、封建的な体制ではなく個人の能力主義を採用する肯定的な登場人物であるとしている。

ギブスンが『妻たちと娘たち』において重要な人物であることに疑いの余地はないだろう。しかし、果たしてギブスは物語の中で肯定的で作者を代弁するような描き方をされているのだろうか。

Patsy Stoneman は、ギブスンの利己的でも感傷的でもない利他主義がモリーに深い影響を与えてはいるとしているが、一方でギブスは娘が自由を得るために戦わなければならない、誤りのある父親であるとしている (116)。中村祥子はギブスンをより詳細に分析し、彼が階級に囚われない知識人でありながら、ホリングフォードの因習的な価値観によってその自由な価値観を貫くことが出来ない様子を指摘している (370)。中村の分析は世代を一つのキーワードとして扱い、興味深いものである。しかし、ギブスンの自由な価値観には、ホリングフォードの因習的な価値観だけでは説明できない明らかな欠落がある。それは、彼が男性に対しては比較的自由主義的な価値観を適用するのに対し、女性には保守的な価値観を適用するという二重基準を持っていることである。本論文では、このギブスンの二重基準を暴くと共に、それが物語の中で（特に同じ男性によって）いかに否定されてゆくかを指摘する。そして、彼の女性に対する保守的な価値観が、物語を通して変容する様子を明らかにする。

1 ミスター・ギブスンの教育観

ギブスンの人物像に関しては、物語の初期、3章に詳細に描かれ、ハンサムで上品なこと (30)、純粹に知的な話題以外には興味を示さず、理性こそが全てを統べる者だと誤解していること (32) が示されている。家庭教師として雇ったミス・エアに対する彼の指示は極めて興味深い。

“Don't teach Molly too much: she must sew, and read, and write, and do her sums; but I want to keep her a child, and if I find more learning desirable for her, I'll see about giving it to her myself.” (34)

ギブソンは、家庭教師のミス・エアがむしろモリーに教えすぎないようにと指示する。

“After all, I am not sure that reading or writing is necessary. Many a good woman gets married with only a cross instead of her name; it's rather a diluting of mother-wit, to my fancy;.... (34)

ギブソンは、知性が母親としての感覚を薄めると考えてさえいる。さらに、彼は続ける。

It was only by fighting and struggling hard, that bit by bit Molly persuaded her father to let her have French and drawing lessons. He was always afraid of her becoming too much educated, though he need not have been alarmed; (34)

ここでは、ギブソンがモリーの知的教育に関しては常に否定的な態度であったことが示される¹。これは、ギブソンが男性の知的能力を重要視し、高く評価しているのとは対照的である。ギブソンはミス・ブラウニングに、彼がミスター・グディナフやミスター・スミスよりホリングフォード卿と一緒にいることを好むと指摘された時、こう答える。

“I seek Lord Hollingford as I should seek such a man, whatever his rank or position might be: usher to a school, carpenter, shoemaker, if it were possible for them to have had a similar character of mind developed by similar advantages. Mr. Goodenough is a very clever attorney, with strong local interests and not a thought beyond.” (145)

ここで彼は、自分が人を身分や階級ではなく、その人物の知性によって判断していると宣言する。しかし一方で彼は娘のモリーには高い知性を持つことそのものを禁じている。もし彼が、自身が言うような知性によって人物を判断するような価値基準を持つなら、娘にはむしろ高い教育を授けたいと思うのではないだろうか。男性をその知性で判断すると宣言しながら、女性に対しては高い教育は必要ないとするギブスの考え方には、彼が男性を評価する時と女性を評価する時に、同じ基準で評価しているわけではないことを示す。彼の心には、男は知的であるべきだが女はそうではないという二重の基準が存在するのである。

しかし、ギブス以外のホリングフォードの科学者であるロジャーとホリングフォード卿は、ギブスとは対照的な立場を取る。ロジャーはモリーに科学的知識を教えようとする。それは、最初は父の再婚に傷つくモリーの気をそらすためだった。しかし彼はその後、モリーに会う時に、スズメバチの巣を持って来る(165)。さらに彼は“*Well, and how are you getting on with Huber; don't you find him very interesting?*” (168)とモリーに尋ねる。ギブスが読み書きすら女性に必要な(34)とする一方で、ロジャーはモリーには科学に対する好奇心があると仮定し、それを学ぶことは当然のことだと考えて、モリーの知識を深めてゆく教師的な役割を引き受ける。ロジャーが下心をもっているわけでないことは、彼がモリーを最初は恋愛対象として考えず(86-87)、後にはシンシアの方に惹かれることからわかる。彼は妹が出来たかのようにモリーに知識を伝える。彼の態度は、女性には読み書き以上の知識は必要ないとするギブスの態度と対照的である

ホリングフォード卿²の価値観もギブスのそれよりロジャーに近い。ホリングフォード卿はギブスに強い影響力を持っている。そもそもギブスが妻を娶るきっかけの一つはホリングフォード卿のアドバイスだった。ホリングフォード卿との社交付き合いは、ギブスが知性を重視する社交生活を送っていること、それを上流階級の人間に認められていること、の証となっている。しかし、ホリングフォード卿が異性を評価する時に重視する事柄は、ギブスのそれとは異なっている。慈善舞踏会でモリーと踊り、モリーの知性を認めたホリングフォード卿は、ギブスとの会話を中断して、モリーの美しさと知性をほめる。

“What a charming little lady that daughter of yours is! Most girls of her age are so difficult to talk to; but she is intelligent and full of interest in all sorts of sensible things; well read, too -- she was up in *Le Règne Animal*-- and very pretty!” (297)

本文中では、モリーは知性によって美しさをも評価されたのか、美しさのおかげで知性を評価されたのかわからないと書いてあるが、一つ明確なのは、彼はモリーの科学に関する知識を余計なものとは思わず、正当に評価出来るということである。ギブスはここでは称賛の言葉に喜びを表すが、彼が3章でモリーに望んだ知性が、「読み書きが出来る程度」であることは忘れてはならない。彼の女子教育観は、ここでホリングフォード卿に間接的に否定されるのである。

ロジャーと、ホリングフォード卿による間接的なギブスの教育観の否定は、ギャスケルによるギブスの教育観への否定につながる。モリーにロジャーの科学的好奇心を理解出来るだけの知性がなければ、最終的にロジャーの愛を勝ち得ることは難しかっただろう。また、ホリングフォード卿のモリーへの称賛は、ミセス・ギブスに、シンシアにも読書をさせればよかったという後悔さえ引き起こす(298)ほど、モリーの評価を高めた出来事であった。物語当初にギブスが求めたような教育のみをモリーに施しては、これらのことは起こり得なかったことを考えれば、ギャスケルがギブスの教育観に疑問を呈するためにこれらのエピソードを挿入した可能性は高い。

さらに、ロジャーのような若い世代のみならず、ホリングフォード卿のようにギブスに近い世代の人間からのモリーの知識に対する称賛は、ギブスの教育観が彼の属する世代のみを原因とするわけではないことを示す。自身の知性によって階級を超えた社会的な交わりを獲得したギブスは、同様に階級間の壁を砕く可能性を秘めた知性の獲得を、女性に対しては与えない。しかし、この矛盾する態度はギブスと同じような科学の知見を持つ者たちによって否定されるのである。

2 ミスター・ギブスの恋愛観

コックスの求愛に対するギブスの態度もまた、彼の持つ性の二重基準を表し

ている。コックスは物語の中に2度登場し、モリーとシンシアに求愛する。コックスの求愛時のギブスンの考え方は興味深い。彼は最初のコックスの求愛で、コックスからの恋文をモリーに届けようとしたベシアを解雇する。さらにギブスはコックスに辛辣な皮肉を飛ばし追い出そうとするが、コックスの父の悲しみを思い、若いころの自分の初恋相手、「かわいそうなジーニー」³(54)を思い出したことから、コックスには恋愛感情を秘密にすることを誓わせるだけにとどまる。

彼はモリーをハムリー家に預け、再婚を考える。ギブスの行動には、息子を持つ親友に対する深い思いやりが存在するが、恋文を届けただけのベシアや、ただ恋の対象となっただけのモリーに対する共感には欠落している。モリーをハムリー家に預け、弟子たちをそのままギブスン家に住まわせることは、この問題の本質はモリーという若い女性の存在にあり、コックスには罪はないとする性の二重基準という価値観が見え隠れする。さらに、モリーをスキャンダルから守るという目的において再婚相手を選ぶことは、再婚相手の人間性を軽く見ていることが伺える。

彼のこの行動は全く不適當だったことが後に明らかになる。再婚後いくらかも経たないうちに、コックスは金持ちの大叔父の相手をするためにギブスン家から出る。さらにミセス・ギブスンとの再婚は、結果的にモリーをプレストンとの醜聞の渦中へと追いやる。一方、コックスは2年後、叔父の財産を継いでモリーに結婚を申し込みにやって来るが、モリーに冷たい態度を取られると、あっさり結婚対象をシンシアに鞍替えする。コックスのこの節操のなさは、彼のモリーへの愛から自身のジーニーに対する変わらぬ愛を思い出して同情的な態度をとったギブスンに対する風刺となっている。コックスのモリーへの愛は、ギブスのジーニーへの愛のように、何人もの恋人を経てさらに妻を迎えても痛みと共に思い出すほど深い愛情ではなかった。それはシンシアという、より美しく自分に愛想のよい相手が現れると消え失せてしまうほど、浅薄な愛だったのだ。最初のコックスの求愛において、コックスに同情して彼を家に留め代わりにモリーをギブスン家から遠ざけたギブスの判断は、コックスへの同情という点でも、モリーを醜聞から守ると言う点でも正しくなかったということがここで明らかにされる。ここでもギブスは“Molly, you must never trifle with the love of an honest man. You don't know what pain you may give” (404) とモリーに言い、“I trust this

will never occur again, Cynthia!” とシンシアを責めるが、コックスの変わり身の早さが暴露された後ではその言葉は空虚に響き、むしろシンシアのギブスンへの反抗に理があるようにみえる。

コックスの起こす一連の騒動においては、男性の愛の衝動は仕方のないことで、女性の方が身を守るために身辺に気をつけなければならないという、ギブスンの持つ二重規範的な思考を表している。しかし、そのギブスンの問題に対する対処の仕方が間違っていたことは、彼の思考法がギャスケルにとって容認出来ないものであった可能性を示唆する。

3 ミスター・ギブスンと男同士の友情

第 38 章では、ギャスケルはミスター・カークパトリックを用いて男同士の友情をシンシアの魅力がしのぐ様を揶揄する。カークパトリックはミセス・ギブスンの義理の兄だが、イースター休暇のある日、ホリングフォードの近くへ来た時に、ギブスン夫妻を訪ねることを決心する。カークパトリックはギブスン家と交流し、モリーとミセス・ギブスンに対してはさほど興味をひかれぬ。しかし、ギブスンに対しては以下のような感想を持つ。

But for Mr. Gibson he had a warm respect, a strong personal liking, which he should be glad to have ripen into a friendship, if there was time for it in this bustling world. (420)

この部分を読むと、カークパトリックは、モリー、ミセス・ギブスンといった女性たちより、知的な男性であるギブスンに対してより強い好意を感じ、(時間があればという但し書き付きだが) 彼と男同士の友情を築いていこうと考えている様子が示される。しかし、これは次のシンシアに対する言及でひっくり返される

And he fully resolved to see more of Cynthia; his wife must know her; they must have her up to stay with them in London, and show her something of the world. (420)

この性急な口調は読者に笑いを提供する。カークパトリックにとっては、知的で尊敬できるギブスンとの友情より、あきらかにシンシアとの親交の方が大切である。語り手は、女性との親交より男性との親交の方が大切であるというホモソーシャル的な考えをカークパトリックより仄めかせながら、すぐにそれをシンシアの登場でひっくり返すことにより、そのホモソーシャル的な考えを笑う。ギブスンの良い評判を失ったシンシアに対するカークパトリックのこのような態度は、ギブスンとカークパトリックの間にあるかすかな考え方の齟齬をも示している。

オズボーンは死の前に、ギブスンの診察を受けたいとギブスン家にやって来る(492)。しかし、ギブスンは不在であった。帰り際、彼はモリーに自身の妻と子供のことについて打ち明ける。

“The name of my wife is Aimée. Aimée Hamley of course. She lives at Bishopsfield, a village near Winchester. Write it down, but keep it to yourself. She is a Frenchwoman, a Roman Catholic, and was a servant. She is a thoroughly good woman. I must not say how dear she is to me. I dare not.... (494)

この告白には、彼の結婚を正しいこととして認識してほしいという願いと、オズボーンに万が一のことがあった場合、彼の妻と子供の世話をモリーに託すという目的がある。この告白を聞くことは、オズボーンに死期がせまっており、彼の妻と子を知り面倒を見てきたロジャーが海外にいるため、極めて重大な責任を伴う。

しかし、彼がモリーにそのことを話したということは、一見すると不自然である。なぜならば、対立している父ミスター・ハムリーを除いても、彼がモリーより秘密を話すことを優先しても良いと思える人物が2人存在するからである。1人は弟の婚約者であるシンシア、もう一人はギブスンである。彼はシンシアに打ち明けようとしたが、彼女が自分を兄として見てくれそうになかった(494)、と語る。

一方、ギブスンはミスター・ハムリーとミセス・ハムリーの親しい友人である。またモリーより遙かに世知にたけた大人であるばかりでなく、最も早くに病気の徴候に気づき、彼の身体を心配している人物でもあった。35章でシンシアとロ

ジャーの婚約について聞かされたギブスは、“I hope you are worthy of him, Cynthia, for you have indeed drawn a prize. I have never known a truer or warmer heart than Roger’s; and I have known him boy and man” (386-87) とロジャーの人格を保証する。ロジャーをこのように知り理解しているギブスは、その兄であるオズボーンのことと同様に知り、理解しているはずである。

だが、オズボーンの選択肢にギブスは上がらない。それは第一にギブスが妻として、ミス・エアのような格下の人間を無意識に除外するような人物であり、一方モリーは第一にミス・エアを父の再婚候補として挙げ、舞踏会でも事務員や本屋と気軽に踊るように、身分に関して開かれた考えを持っているからである。

また、ギブスが、シンシアとロジャーの秘密の婚約を知った際に、シンシアの婚約を秘密にしてほしいという懇願より、ミスター・ハムリーとの約束を優先する人物である (387-88) ことも深く関係している。彼の家父長的な価値観からすれば、ロジャーの父であるミスター・ハムリーとの約束は、自分の娘であるシンシアの願いよりも当然優先されるべきものである。

その価値観はオズボーンにとっては息子である自分の考えより、父ミスター・ハムリーの考えに重きを置くのではないかと考えさせるような、信頼できないものであった。そのため、オズボーンは自分に何かがあった時に妻を守ってくれる者として、ギブスではなく、モリーを選んだのだ。このオズボーンの見方は、窮地に陥った時に頼る人物として女性を挙げているという点で興味深い。彼は男同士であることや家父長であることを優先させることなく、純粋に自身を認め、万が一の時にも信頼して頼れる人物を選択したのだ。オズボーンの死後、モリーとギブスは、どちらがオズボーンの妻に手紙を書くかについて話し合う (561)。モリーがあっさりとその役目を引き受けると、ギブスは（それを頼んだのが自分であるにもかかわらず）気分を害する。これは、本来なら自分のような人間が負うべき重大な役目をオズボーンがモリーに託したこと、それをモリーが受け入れたことに対する反発である。こうしてギブスの家父長優先、男性優先的な考えは、オズボーンによって否定される。

オズボーンの弟ロジャーも、兄同様、家父長優先、男性優先の考えを否定する。ロジャーと婚約した際にシンシアは、同席していたロジャー、ミセス・ギブス、モリーの3人に、この婚約を他の誰にも知らせてはならないと頼む (374-75)。

この婚約は交わされた直後にミセス・ギブスンからギブスンへと告げられる。ギブスンはシンシアの懇願を意に介さず、ミスター・ハムリーとの約束からこのことを報告しなければならないと考える。シンシアが“A man’s promise is to override a woman’s wish then, is it?”と尋ねると、彼は“I don’t see any reason why it should not” (388)と答える。シンシアはギブスンの男性優先主義を敏感に感じ取り、それを示唆したのだが、ギブスンは意に介さない。

ギブスンはこの婚約についてはロジャーが旅先から手紙でこのことをミスター・ハムリーに知らせるかもしれないと考えて、ミスター・ハムリーに知らせるのを一週間遅らせる。このときにギブスンは、ミスター・ハムリーと自分との家父長同士の約束は、当然娘シンシアの願いよりも優先されるべきであり、また、ロジャーもそう考えていると仮定している。しかし、ロジャーはその考えを裏切る。ロジャーからの最初の手紙はミスター・ハムリーに届いていたが、その中にはシンシアとの婚約について触れられていなかった。結果的に婚約はギブスンからミスター・ハムリーへと伝えられて、ミスター・ハムリーは激怒する。ミスター・ハムリーはギブスンの間違いを怒りながら正す。“That shows you’ve no sons. More than half their life is unknown to their fathers”(390). ここでは、ギブスンとロジャーの考え方の違いが浮き彫りになる。ギブスンは婚約のような重大な出来事は真っ先に家父長である父親が把握しなければならないことだと考えた。しかし、ロジャーは家父長である父よりも恋人の意思を尊重したのだ。

4 ミスター・ギブスンの変化

こうして、ギブスンの提示する家父長的、男性優先的な考えは物語の中で否定されてゆく。しかしギヤスケルはギブスンを一面的な見方では描かない。物語当初においてははっきりと家父長的な思考を持つ彼は、物語が進むごとにわずかではあるが確かな変化の兆しを見せている。

変化の兆しとして、ギブスンがモリーにプレストンとの醜聞を問いただす場面が挙げられる。興奮したギブスンは、シンシアのことを慮って黙り込むモリーの腕を掴む。

He had taken hold of her two arms just above her wrists, as she had first

advanced towards him; he was unconscious of this action; but, as his impatience for her words grew upon him, he grasped her more and more tightly in his vice-like hands, till she made a little involuntary sound of pain. (516)

ここで、彼は理性を失い暴力的な行為でモリーを傷つける。一方モリーは、自分を信頼し全てを委ねるように、言葉でギブスンに説き伏せる。この時、理性が全てを統べると理解していた(32)はずのギブスは、モリーより感情を露わにし、衝動的に振る舞い、そして結果的には、より理性的なモリーの判断に従うことになる。この場面は、理性的な父の言葉に従う娘という物語の構図が崩れ、モリーが自立し始めたことを示している。さらにギブスンがモリーを信頼し事を委ねるといふ、これまでとは異なる父と娘の関係が示唆される。この出来事をきっかけとして、ギブスはこれまでの家父長的な父親とは異なる顔を読者に見せ始める。

中村もギブスンの変化について言及している。物語の初めにおいて、ギブスは娘への求婚は親を通して行われなければならないと考えていたが、物語の最後にロジャーがギブスンにモリーへの思いを伝えるように頼んだところ、“I’m not going to be a message-carrier between any young man and woman”(642)と断り、ロジャーが戻って来た時、自分で言うべきだと述べている(中村 388)。

ギブスンの変化を示す場面は、中村が指摘した場面以外にも二箇所ある。一つはオズボーンの死の直後、ミスター・ハムリーのもとへ留まるかどうか父親が尋ねる場面である。

“He’s gone to bed,” said he at length. “Robinson and I have got him there. But just as I was leaving him he called me back, and asked me to let you stop. I’m sure I don’t know — but one doesn’t like to refuse at such a time.”

“I wish to stay,” said Molly.

“Do you? There’s a good girl. But how will you manage?”

“Oh, never mind that. I can manage. Papa, — she paused — …(554)

ここでギブスンが、“I’m sure I don’t know”とモリーに告白していることに注

目したい。ギブスはモリーがハマリー家に留まることについて、自分ではどうしてよいかわからないとモリーに判断を求める。さらに、“But how will you manage?” “Oh, never mind that. I can manage. Papa,” というやりとりには、ギブスがモリーを頼り、信頼している様子がうかがえる。

ギブスの再婚の際、ギブスはハマリー家に預けられていたモリーに全く相談することなしに再婚を決め、その結果のみを伝えた。ギブスはミセス・カークパトリック(後のミセス・ギブス)との結婚がいかに理にかなったものであり、モリーに利点をもたらすかを理路整然と説明するが、モリー自身が再婚をどう考えているかについては意に介しない。モリーが、“So I was sent out of the house that all this might be quietly arranged in my absence?” (112) と反感を口にすると、怒りを露わにしてその場を去る。ここには、父は娘より賢く正しく判断できるので、娘は父を信頼して従うべきだという、家父長的な考えが読み取れる。

ミセス・ハマリーの死の際においても、モリーは父の許可を得ていることを理由にハマリー家を訪問しようとする(186)。また、ミセス・ハマリーの意識が混濁状態に陥った時も、モリーはハマリー家に留まる許可を父に求める。この時のモリーとギブスは、行動においてまず父が何を考えているかを娘が知り、娘が父の判断を仰ぐ一方向的な関係だった。

しかし、オズボーンの死の際には、むしろギブスの方がモリーを頼り、モリーの判断を仰ぐ。それは、モリーとギブスの関係が、家父長的な父と娘の関係から変化しつつあることを示している。父が娘に一方向的に承認を与え、娘がそれに沿って行動するのではなく、互いの判断を尊重し、時には父が娘に判断を仰ぐ。そこには、これまでのギブス親子に見られなかった双方向的で新しい行動様式が存在する。

モリーとギブスがハマリー家から一時的に帰宅する際に、二人は次のようなやりとりをかわす。

“There’s Hollingford church-spire,” said she presently, as they drew near the town, and caught a glimpse of the church through the trees. “I think I never wish to go out of sight of it again.”

“Nonsense!” said he. “Why, you’ve all your travelling to do yet; and if these

new-fangled railways spread, as they say they will, we shall all be spinning about the world...(561-62)

あの教会の尖塔が見えない場所には行きたくないというモリーの言葉は、新しく自分の前に開けている世界に対する怯えがある。この直前の父と娘の会話は、オズボーンの妻にどちらが手紙を書くべきかであった。オズボーンの死とフランス人で召使出身のオズボーンの妻との関わりから、モリーは敏感に時代の変化を察知し、尻込みする。しかし、ギブスンはその娘に対して、“Nonsense!”と叱咤激励する。“you’ve all your travelling to do yet”の‘you’は、この時点ではロジャーとモリーが恋人関係になることは明らかではない⁴ため、モリーのみを指している。物語の初めに、女性には読み書き以上の知識はいらないと家庭教師に指示したギブスは今、モリーにもっと広い世界へと旅立へと背中を押す。そこには、モリーの成長を知り、モリーがより広い世界で見聞を深めることを望む、父の姿がある。

結論

ミスター・ギブスは、階級という社会の中では開放的な様子を見せたが、ジェンダーという区分においては保守的であった。彼は、女性に余分な知性は不必要だということを物語の初めに宣言する。しかしその考え方は、彼と科学的好奇心を共有する、ホリングフォード卿とロジャーによって間接的に否定される。またギブスは、男女の恋愛沙汰において、男性に共感し女性に非があることを前提とした行動を取る。だが、彼がその父の感情を思いやり、自身の恋を重ね合わせたミスター・コックスには結局それだけの価値はなく、彼の行動は結果的にミセス・カークパトリックという気の合わない妻を引き当て、モリーをさらなるスキャンダルの危険にさらすことになる。さらに彼は、他の男性登場人物との関係において、彼が女性より男性を優先しているにもかかわらず、彼自身は何度も自分より女性を優先されるという憂き目にあう。Elaine Showalterは、ギャスケルと同世代に位置するヴィクトリア朝の作家たちを、フェミニン段階の作家と位置付け、その抑圧的な創作環境を指摘した(25)。『妻たちと娘たち』の中でギブスンが味わう悲哀は、ギャスケルの中にある男性優先社会への静かな反発である。

しかし、『妻たちと娘たち』は明るい未来へ向けられた希望の物語でもある。

物語を通じてギブスは、わずかながらもモリーの自立を認め、より広い世界へとモリーを後押ししようとする。『妻たちと娘たち』はモリーの成長物語であったが、父であるギブスの成長をも描かれている。娘が父に影響され、成長するのと同様に、父も娘の成長に影響され、変化してゆくのだ。

注

- 1 ギブスの女子教育に対するこのような否定的な態度は、物語の舞台となる19世紀前半においては、ごく当たり前で珍しいことではなかった。19世紀半ばにはエミリ・デイヴィスを中心として女子教育改革運動が行われるが、それに対して近代科学の側からも、女性の身体性を根拠として勉学に反対する主張があった(香川 84-85)。
- 2 ホリングフォード卿は、ミスター・ハムリーが彼の娘(実際には息子しかいないが)と自分の息子を結婚させることを夢想する(74)程度の年であることから、ギブスン氏とさほど離れているとは考えられない。
- 3 後に、ジーニーが彼の初恋の人であったことが文中で明かされる(143)。
- 4 ロジャーが旅先から帰って来るのは、この後55章(588)である。

引用文献

- Gaskell, Elizabeth. *Wives and Daughters*. London: Penguin, 2003.
- Pike, E.Holly. *Family and Society in the Works of Elizabeth Gaskell*. New York: Peter Lang Publishing, 1995.
- Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing*. Princeton: Princeton UP, 1977.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Manchester & New York: Manchester UP, 2006.
- Wright, Edgar. *Mrs. Gaskell: The Basis for Reassessment*. London: Oxford UP, 1965.
- 中村祥子『E. ギヤスケルの長編小説』、三友社出版、1991。
- 香川せつ子「女性の高等教育—フェミニティへの挑戦と妥協」『イギリス近現代女性史研究入門』河村貞枝・今井けい編、青木書店、2006。

(大阪市立大学大学院博士後期課程)

Abstract

A Daughter's Father: The Change of Mr. Gibson

Sayaka Tamamori

This paper focuses on Mr. Gibson, the heroine's father in *Wives and Daughters*. Even though some critics consider Mr. Gibson relatively open-minded and positive, he has evident gender prejudices. However, his prejudiced ideas are circuitously denied by the novel's male characters or they cause problems. For example, he dismisses education for girls, advising, "Don't teach Molly [the heroine] too much" because "it's rather a diluting of mother-wit." However, Roger, Molly's lover, teaches her biology, and Mr. Gibson's close friend Lord Hollingford praises Molly's knowledge. When Mr. Cox, one of Mr. Gibson's disciples, falls in love with Molly and writes a love letter to her, Mr. Gibson fires the female servant who has brought the letter to Molly and keeps away his daughter from home while he lets his disciple stay at his home, as he did in the past. However, Mr. Cox soon leaves Gibson's house because he is going to inherit an estate. In addition, Mr. Cox later demonstrates superficiality of his love by easily switching the target of his affections from Molly to Cynthia. Gaskell also describes how Cynthia's attraction overwhelms the male friendship between Mr. Gibson and Mr. Kirkpatrick. Moreover, she describes how two young men in the novel, Osborne and Roger, behave differently from Mr. Gibson in trusting or promising to women.

In describing Mr. Gibson's defects, Gaskell also depicts his change. Toward the novel's end, Mr. Gibson recognizes Molly's sense of independence. At Osborne's death, Mr. Gibson depends on Molly and leaves a decision about what she should do up to Molly. When Molly says she never wishes to leave the sight of the town's church, Mr. Gibson encourages her to go abroad. These instances suggest his change of attitude toward his daughter. In this novel, Gaskell implies that growth is not only for women but also for fathers, and that daughters' growth can influence and change their fathers.

